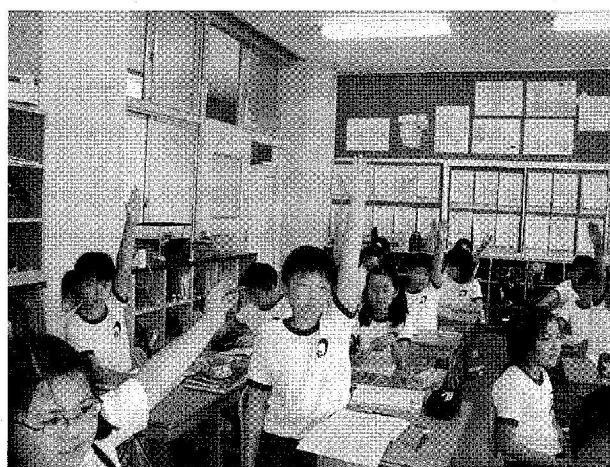


社会科の研究

今井 渉



キーワード

未来の社会の担い手としての認識 社会生活の关系的把握・動的把握

主張

本研究における社会科では、「社会生活は様々な人々の結びつきによって成立している」という关系的な把握と共に「社会生活は人間の知恵と努力、創意と工夫によって変化し続ける」という動的な把握を大切にする。

社会は様々な人々の結びつきによって成り立ち、よりよい生活を具現するために変化し続ける、そして、その中心には「人間」がいる。そのような認識に立ったとき、子どもは、自分もその一員であると自覚し、「未来の社会の担い手」としての一步を力強く踏み出すことになるからである。

具体的には、「人物を軸にしてとらえること」、「変化を追うこと」を大切にして学習を展開していくことで、本研究における社会科で求める「未来の社会の担い手としての認識を創りあげる」姿の具現に迫った。

I 未来の社会の担い手としての認識を創りあげる社会科

1. 社会科で求める子ども

本研究における社会科では、社会的な事象の確かな事実認識や関係把握の上に立ち、主体的に社会的事象の意味を解釈し、よりよい社会生活を具現するための社会認識を創りあげる子どもを求めてきた。そのために社会の時間的なつながりや空間的な広がりにより一層学習内容として取り入れようとした。

第3年次においては、求める子ども像をより端的に焦点化し、「未来の社会の担い手としての認識を創りあげる子ども」とした。さらに、「社会を時間的なつながりや空間的な広がりからとらえること」を「社会を关系的、動的にとらえること」と整理し、研究を進めた。

本研究において、「关系的」にさらに「動的」を加えたのは、社会科が关系的な把握のみに留まっているならば、社会科は「未来の社会の担い手」を育てる教科とはなり得ないと考えたからである。社会は様々な人々の結びつきによって成り立ち、よりよい生活を具現するために変化し続ける、そして、その中心には「人間」がいる。そのような認識に立ったとき、子どもは、自分もその一員であると自覚し、「未来の社会の担い手」としての一步を力強く踏み出すことになるのである。

2. カリキュラム改善の視点

「小学校3年生から6年生までの段階性」「学年内の単元の連続性」から下記の点に留意してカリキュラムを編成する。

	段 階	学年内の単元配列
小学校3年生	地域の特色（よさ）から、社会的事象の意味を把握する学年。	具体的には、1学期は「現在もっているよさ」に重点がかかる単元を、2学期と3学期には「生み出されつつあるよさ」に重点がかかっていく単元を配列する。
小学校4年生	暮らしを支えている人々の取組から地域の組織的・計画的な結びつきとその意味を把握する学年。	具体的には1学期は組織性・計画性の把握を軸に、2学期は、組織性・計画性が生み出された経緯を軸に、3学期は、結びつきを広くとらえる。
小学校5年生	様々な産業の変化や発展から、産業に従事している人々の取組が国民生活に与える影響を把握する学年。	産業に従事している人々の取組を歴史的な経緯からとらえ、その意味を国民生活の向上、環境の保持等からとらえる。
小学校6年生	政治、外国との関わり、文化、の移り変わりから、国や地方自治体、自分の在り方を考える学年。	政治史、外国との関わりの歴史、文化史、の3つのテーマ史から構成。それぞれのまとめで、現代の在り方を、意志決定・価値判断する。

3. 授業改善の方策

社会科における学習過程を以下のように整理し、「感性、科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」を以下のように位置づけた。

第1の過程 社会の現状把握から人の知恵や努力の着目へ

<働きかけ>

社会的事象と自分のくらしとのかかわりを追求しようとする意欲を高める（問いの発生）



社会生活を成り立たせている事実を関係的に把握しようとする（問いの焦点化）



社会的事象と自分のくらしとの関係を見出す（問いの解決）



社会生活の向上に向けた取組への着目（新たな問いの発生）

「感性」
社会を創り出す人の知恵や努力に共感する

- 社会的事象と自分のくらしとのかかわりに目を向ける資料の提示
- 社会的事象に内在する事実を調べる場の設定
- 社会的事象に内在する事実の関係づけを図り、自分にとっての意味を考える活動の組織
- 社会生活の向上に取り組む人物に関する資料の提示

第2の過程 人を軸とした社会の動的把握から自分の在り方の着目へ

人物の知恵や努力の背景にある思いを追求しようとする意欲を高める（問いの発生）



人物の知恵や努力の背景にある論理を把握しようとする（問いの焦点化）



人物の論理と社会生活の変化との結びつきを見出す（問いの解決）



よりよい社会生活を具現する自分の在り方への着目（新たな問いの発生）

「科学的な感性」
知恵や努力の背景にある論理を見出そうとする

- 取組の困難さに目を向ける活動の組織
- 人物の取組の背景を明らかにする活動の組織
- 人物の取組の社会への影響を調べる場の設定
- 人物の取組から学んだことをまとめる場の設定

第3の過程 社会の未来と自分の在り方の見出しへ

社会の未来やその中で生きる自分を追求しようとする意欲を高める（問いの発生）



人物の論理と自分の在り方との結びつき把握しようとする（問いの焦点化）



社会生活における自分の在り方を表し、交流する（問いの解決）

「科学的なものの見方・考え方」
人の論理と社会生活の変化を結びつける

- 社会的事象にかかわるこれからの自分の在り方について、学んだことを生かして表現する場の設定。
- 仲間との相互評価を通して、社会に対する認識の広がりや深まりを自己評価する場の設定。

4. 評価方法

<コンセプトマップによる評価>

- 「単元名」から連想する事柄を、単元前と単元後にコンセプトマップを作成する場を設定し、その比較から認識の形成について評価する。

<キーワード法による評価>

- 人々の取組を調べ、その特徴をキーワードとしてまとめる場を設定し、期待した感性、科学的な感性と照らし合わせて評価する。

<キーワード作文法による評価>

- これからの社会やその中で生きる自分の在り方について、キーワードを使って自分の考えを作文でまとめる場を設定し、期待した科学的なものの見方・考え方と照らし合わせて評価する。

Ⅱ 実践の概要

第4学年

「中越地震が教えてくれたこと」 ～地震から人々のくらしを守る取組～

1. 災害からくらしを守るための社会の一員としての在り方を見出す学び

4年生の社会科では、「私たちのくらしを支えている地域の様々な人々の取組を知ろう」を年間のテーマとして設定した。学年の最初には「交通事故から私たちのくらしを守る警察署の仕事」について学び、交通安全に対する意識を高めてきている。

本単元は「災害から人々の安全を守る工夫」について、「災害」として「地震」を取り上げる。一昨年中越地震を経験した子どもたちにとって、日常のくらしを脅かす切実感のある事象だからである。

附属長岡小学校は、地区防災センターとなっており、体育館ギャラリーと相談室には、地震に備えた物資が備蓄されている。本単元では、その「災害用備蓄品」を軸に学習を展開していくことで、社会科で求める子どもへ迫っていく。

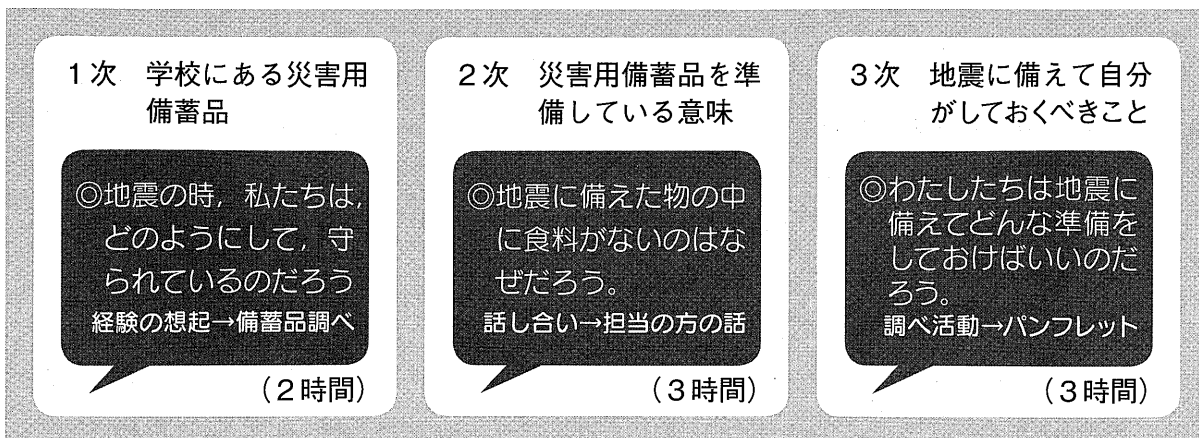
具体的には、「災害用備蓄品の種類」について実際に調べたり、「災害用備蓄品の意味」について考えたりすることで、市役所の人たちが中越地震の経験を生かして備蓄品を用意し、地震から人々のくらしを守る努力を続けていることをとらえていく姿を期待した。学習のまとめでは、市役所の人たちの取組や考え方から学んだことをふりかえり、「自分にできる地震に対する備え」について考えていくことで、身近な人と協力しながら災害から身を守ろうとする意欲を高め、「未来の社会の担い手としての認識」を創りあげていくことを願った。

2. 単元の構想

(1) 単元の目標

地震からくらしを守る取組について校内にある災害用備蓄品を調べ、中越地震での経験と関係づけてその意味を明らかにしていく中で、市役所の人たちは、まず自助、次に共助、最後に公助という考え方で地震に対する備えをしていることを理解し、一人一人が地震からくらしを守ろうとする準備を怠りなく行うことが大切であることに気づく。

(2) 追究の構想 (8時間)



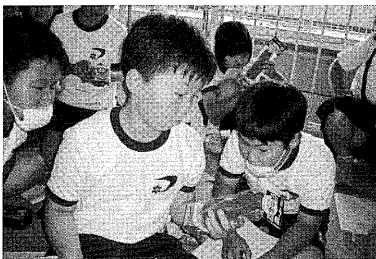
3. 授業の実際

(1) 地震に備えた品物にはどんな物があるのかな。(人の知恵や努力に着目する第1の過程)

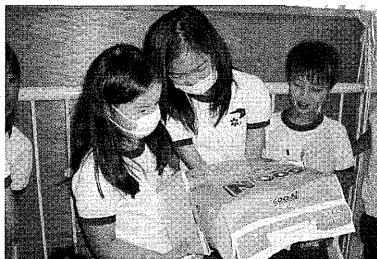
4年生になって「私たちの安全なくらしを支えている取組」を調べてきた子どもたち。安全を脅かす事象として「交通事故」に続いて「地震」を取り上げて学習を進めていくことにした。

「地震」は、新潟県中越地震を経験している子どもたちにとって、日常の安全なくらしを脅かす最も切実感のある災害だからである。

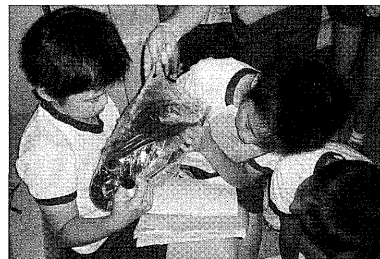
附属長岡小学校は地区防災センターとなっている。そこで学校の体育館ギャラリーにある災害用備蓄品について調べていくことにした。



懐中電灯だ！



おむつがあるなんて予想外

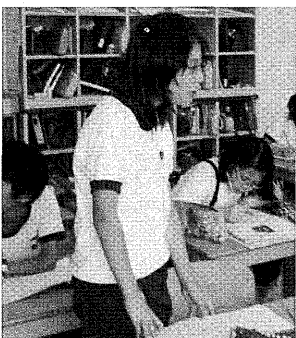


ライトかなあ？

調べてみると次のようなものがあった。

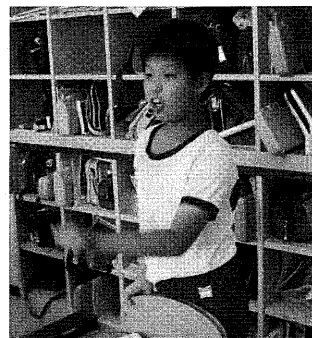
- | | | |
|---------|-----------------|--------------|
| ・毛布 | ・おむつ（赤ちゃん用 大人用） | ・懐中電灯 |
| ・ブランケット | ・ライト | ・授乳と着替え用のしきり |

「市役所の人は何でこれらの品物を用意しているんだろうね」と問うと、次々と発言が続いた。



毛布やブランケットは寒さをしのぐためだと思います。

ライトがあるのは停電になったとき、全体を明るくするためだと思います。

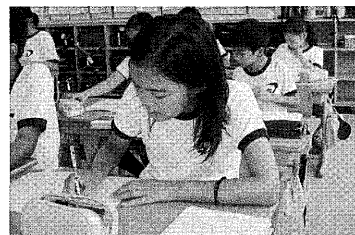


他にも、「おむつは赤ちゃんやお年寄りが困らないようにするため」「しきりは授乳や着替えの時見られないようにするため」等の意見が出された。

地震のときに経験したことをもとに、感性「人の知恵や努力に共感する力」を働かせ、災害用備蓄品の意味に目を向けていった姿である。

市役所の人は、地震に備えて様々な品物を用意してくれていることがわかった子どもたち。しかし、何か納得しない様子であった。それは予想していた「食料」がなかったからである。璃子さんもその1人であった。璃子さんはこの授業の後、次のようにノートに書いた。

毛布や懐中電灯は予想したとおりで、地震に備えてきちんと用意してあるんだなあと思ったけど、予想とは違って乾パンとか水はなかったです。地震の時、食料は大切だと思うけどなぜ置いていないのかな。



「災害用備蓄品の中になぜ食料がないのか」という問いをもち始めた姿である。

(2) 地震に備えた品物にはなぜ食料がないのか。

(社会生活における自分の在り方に目を向ける第2の過程①)

璃子さんは、社会科でわからないことがあるとすぐに調べてくる等、事実を自分から追求していくことのできる子どもである。本単元では、そのよさを生かして、「なぜそうなっているのか」という事実の背景にある人の論理に迫っていく姿を期待した。

璃子さんはじめ多くの子どもが疑問に思っていた「調べた品物の中になぜ食料がないのか」をさらにはっきりさせていくために、学校のもう一つの保管場所である相談室の備蓄品についても調べてみた。

薬みたいなのが
入っているね。
リュックの中に何
個も入っているよ。



やっぱり食料はない
なあ。薬がたくさんあ
るのは、病気にかっ
たり、けがをしたりし
た人のためかな。

備蓄品を調べる璃子さん（右）



これは、人を助け出
すための道具だな

車いすが何台も用意され
ているなんて知らなかった。
足の不自由な人のためかな。



相談室にあったものを出し合うと、次のようなものがあることがわかった。

- | | | | | |
|---------|-----|------|----------|--------|
| ・薬等の医療品 | ・担架 | ・松葉杖 | ・レスキュー用具 | ・携帯ラジオ |
| ・ほ乳瓶 | ・毛布 | ・発電機 | ・簡易トイレ | ・紙おむつ |

地区防災センターとなっている附属長岡小学校にある備蓄品は、体育館ギャラリーと相談室にあるものがすべてである。

これだけたくさんの品物が用意されているのに、食料は一つもない。「くさるからかな…」等つぶやく子どもたち。璃子さんも首を傾けている。

その様子を見とり、「みんなの考えていきたいことは、なぜ食料がないのかということですね。」と投げかけると、璃子さんはじめ学級の大勢がうなずいた。科学的な感性「知恵や努力の背景にある人の論理を見出そうとする力」を働かせて問いを強くもった姿である。

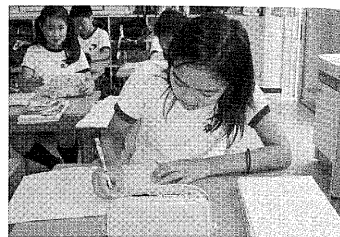
そこで、◎（追求問題）を「地震に備えた物には、なぜ食料がないのか。」と決め、学習をさらに進めていくことにした。◎を追求する中で、璃子さんには、事実の背景にある市役所の人の考えに迫っていくことを願った。

(3) 地震の時にまず大切なのは食料ではなく人を助けることなんだ。

(社会生活における自分の在り方に目を向ける第2の過程②)

まず自分の考えをノートに書いてから話し合いに入ることにした。璃子さんは次のようにノートに書いた。

中越地震の時は、寒かったことやトイレに行けなかったことで病気になる人がいた。だから薬とかトイレをきちんと準備しているのだと思う。食料は2日目か3日目ぐらいには届くようになってから置いていないのかな。



災害用備蓄品に食料がない理由を何とか説明することができたが、「なぜ食料がないのか」がはっきりしないため、考えに自信がもてない様子であった。

食料には賞味期限があるから置いておくさってしまふ。地震はいつ起こるかわからない。



食料は地震になってから届けてもらえばいい。それにコンビニとかに行けば売っている。

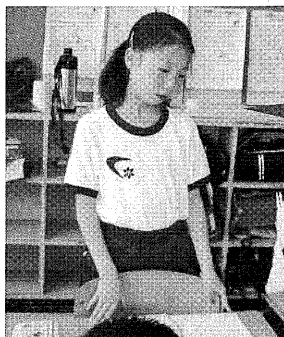
仲間の発言が続いている間、璃子さんは挙手をせずじっと考え込んでいた。そこに里美さんが「避難所にはものすごくたくさんの人が来るんだから、食料を置いていてもすぐ足りなくなってしまう。だからあまり役に立たないんだと思います。」と発言した。

すると璃子さんの顔がぱっと上がり、ゆっくりと挙手をした。

里美さんの意見に付け足して、地震の時にすぐに必要になるのは食料ではないと思います。地震の時、すぐに必要になるのはけがや病気の人のための物です。だから、薬やトイレが用意されているんだと思います。



璃子さんが発表すると、「璃子さんに付け足して…」と意見が次々に続いた。



私たちは食料がなくてもすぐには困らない。お年寄りや赤ちゃん優先なんだと思う。

地震になった時すぐ必要な物だけ備えているんだと思う。



仲間の発言をうなずきながら聞く璃子さん。里美さんの発言から「地震の時に食料は本当に必要なのか」と自分の考えを問い直し、実際に調べた災害用備蓄品と地震の際の経験とを結びつけることで、市役所の人が災害用備蓄品を用意した意味をとらえてきた姿である。

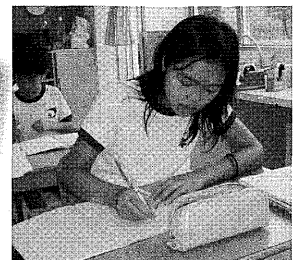
(4) 自助共助公助の考え方を大切にしていざというときの備えをしよう。

(社会生活における自分の在り方に目を向ける第2の過程～これからの自分の在り方を見出す第3の過程)
次の時間、市役所の人から実際に聞いた話を資料として配付した。

地震などの大きな災害があったときの基本的な考え方は、「自助」→「共助」→「公助」です。
地震などの災害は、交通事故や火災と違い、被害を受ける人がとても多いのです。とても全員をすぐに助けることはできません。
そうなるはず大切なのは、「自助」、つまり、自分で自分を助けることです。自分で動くことのできる人は、食料を買ったり、避難所に避難したり、自分がどうすればいいかを考えて自分で自分を助けてほしいのです。
しかし、自分で自分を助けることのできない人、赤ちゃんや体の不自由な人、けがをしている人がいます。その人たちは、動くことのできる人が助けてあげることが大切です。お互いに助け合うこと、それが「共助」です。
共に助け合うことのできるように、長岡市では地区防災センターにいろいろな物を準備しています。
それでも助けられない人もいます。大きな事故に巻き込まれたり、大きな被害を受けたりした人です。そのような方々のために、市役所、警察署、消防署などの職員が働きます。
地震はみんなが被害者です。その中で、誰を早く助けなければならないのか、本当に助けなければならない人なるべく早く助けることができるように、「自助」→「共助」→「公助」という考え方があるのです。
地区防災センターに置いてある品物もそのような考え方から準備しています。

璃子さんは、資料に線を引きながらじっくりと読み進めていった。そして、資料からわかったことを全体で出し合った後、次のように自分の考えをまとめた。

私は市役所の人の話を聞いて、一番大切なのは自助だと思いました。自分がだいじょうぶなら、近くの人を助けることができるからです。だから、自助をするために自分で自分の身を守ることができるように、ふだんから生活を整えておくことが大切です。私はこの学習をして、いつ震災が起きてもだいじょうぶなように心がまえをしておくことが大切だと思いました。



科学的なものの見方・考え方「人の論理と社会生活の変化を結びつける力」を働かせ、市役所の人々の災害に対する考え方を受け止め、地震に備えた自分の在り方を見出していった璃子さん。

その後のパンフレットづくりでは、「地震の時に持っていく物」、「家の近くにある避難所」、「日頃の心構え」等を丁寧にまとめていった。

社会科で求める「未来の社会の担い手としての認識」を創りあげ、日々の生活の中で学習したことを生かそうとしている姿である。

4. 成果と課題

「未来の社会の担い手としての認識を創りあげる」ための学習過程が、「事実認識を中心とした第1の過程、関係把握と意味認識を中心とした第2の過程、社会生活における自分の在り方を見出す第3の過程」として見えてきた。本実践では、地震時のくらしと市役所の人たちの取組との関係把握を2回行った。1回は1つ1つの備蓄品とくらしとの関係、もう1回は「なぜ食料がないのか」を軸に備蓄品全体とくらしとの関係を考えていった。そのことにより備蓄品が置かれている意味が把握され、市役所の人たちの災害に対する考え方をとらえていくことができた。

関係的に繰り返し考えていくことが事実の背景にある人々の論理に迫ることにつながり、そのことが自分の在り方を見出しにつながることを明らかにすることができた。今後は、関係的な把握の具体的な様相についてさらに考えていきたい。

<主な参考文献>

- 門脇 厚司 1999 「子どもの社会力」 岩波新書
岩田 一彦 2001 「社会科固有の授業理論」 明治図書
小西 正雄編著 1997 「未来志向の社会科授業づくり」 東京書籍
田中 力 2006 「社会科の研究授業づくり」 明治図書